現代の日本人への福音を語ろう

中央聖書神学校チャペルズームによる
2022 年 1 月 22 日

ありがとうございます。私は今日のチャペルの講師としてお招きを受けました、佐々木正明と申します。

私をご存じない方もいらっしゃることでしょうから、まず、自己紹介をしておきたいとおもいます。私は 1944 年生まれ。高校 1 年生のとき、16 歳でクリスチャンになりました。16 期生として中央聖書学校入学。1966 年 21 歳で卒業、それから江東区大島、続いて沖縄の金武村で計 7 年間、開拓伝道をしました。それからフィリピンに渡り、4 年間神学校で学んだあと、1997 年宣教師として、主に山岳地に住む未開部族の間で開拓伝道に携わりました。しかし、1991 年に次男の病気のために宣教師を止め、長崎県佐世保市で開拓を始めて 31 年、現在に至っています。もうすぐ 78 歳に」なりますが、いまだ教会になりきれない伝道所で、言うならば、うだつの上がらない牧師をしています。

私はこの年になって、長い間考え続け、学び続けてきたことが、やっと少しわかりかけてきたような気がします。それは、非常に、非常に、本当にとっても大切なことです。だから、何としても、それを若い伝道者たちにお伝えしたいと願っています。そのためには本当は、100 時間でも 200 時間でも話し続けたいし、そうしなければならないと感じています。将来の日本の宣教、世界の宣教を担う、若い兄弟姉妹たちに伝えたいと、腹の底から、切実に願っています。今日はあと 15 分くらいですが、話す機会を与えられたことを喜んでいます。

私が最も言いたいことは、聖書が教えている福音を、現代に生きている日本人に伝えるということです。

先ほど読んでいただいた古い皮袋の話は、ある時代ある特定の環境では、絶対と思われていたものでさえ、時代が変わり事情が変化すると、変わらなければならなくなるということを、教えています。

Ⅰ． 私たちは聖書の福音を語っているか。

最初にお話ししたいことは、私たちは聖書の福音を語っているかという問題です。次に、私たちは現代の日本人に語っているかということです。

試しに一つのテストをしたいと思います。以下の言葉は、正しい福音理解かどうか判断してください。「イエス・キリストは、私の罪の刑罰を身代わりに背負い十字架の上で死に、三日目に死を打ち破って甦ってくださったと信じるならば、あなたは救われます。」

これは私たちが長い間、何の疑いもなく語り続けてきた、福音派神学の神髄のような言葉です。ところがこの一見正統的な神学的文章は、決定的に間違っています。絶対に、間違いなく間違っています。一つや二つの間違いではなく、多くの間違いがあるのです。

第一の間違いは、私たちが救われるのは、神学的ステイトメント、信仰告白、あるいは教理や信条を信じることによってでは、ないということです。そうではなく、イエス・キリストという、人となってくださった神を信じることによって、救われるのです。そのイエス・キリストは、私たちの罪のために身代わりに十字架にかかり、死に、甦ってくださったお方なのです。私たちが救われるのは、教理を受け入れたり、信条を告白したりしてではなく、一人のお方、神であるお方、神格と人格を持っておられるお方、いま生きて私たちと共にいてくださるお方を、信頼することによってなのです。

第二の間違いは、救いはイエス・キリストを信じることによって与えられるかのように、語られていることです。私たちの信仰の父といわれているアブラハムは、イエス・キリストを信じていましたか。その十字架を知っていましたか。身代わりの死について知識を持っていましたか。彼は罪の悔い改をしたでしょうか。どの程度お罪意識を持っていたのでしょうか。

第三間違いは、信じるという言葉の不確かさに関わります。信じるってどういうことでしょう。あるいは信仰を持つと言い換えても同じです。これは聖書が教えている救われる条件を、正しく表現している日本語でしょうか。私たちが救われるのは、信じるからでしょうか。それとも、頼るからでしょうか。「信仰を持つならば」でしょうか。「信頼するならば」でしょうか。問題点はほかにもありますが、今はここで止めておきましょう。

仮に、イエス・キリストに頼るならば、イエスキリストという、私たちの罪を身代わりに背負い、十字架で死に、死を打ち破って甦ってくださった方に頼って、信頼して、救われるというのが正しい理解だとしても、そのように信じなければ、救われないのでしょうか。

私はふざけてこのようなことを言っているのではありません。日本人への宣教という課題に、重大な意味を持つ事柄としてお話ししているのです。キリストを信じると言っても、十字架の身代わりの死を信じると言っても、悔い改めると言っても、そういうことを知らないで、その意味を理解しないままで、本当にそのようなことができるのでしょうか。もし、教えられなければ知ることはないし、知ることができなければ理解できないし、理解できなければ信じられないとするならば、それは知る、そして理解するという行い、人間の頭脳の業績に関わる救いであり、すでに聖書の言う「行いによらない救い」ではありません。

私の次男は今年 47 歳になりますが、知的障害を抱えていて、4、5 歳程度の知能しかありません。特に話す能力は、1 歳児にも劣ります。彼が、福音派教会の教える信仰を、理解できるとは到底思えません。でも、1 年と少々前に、天に召された母親のところに、自分も行けるんだと、心から思い込んで、毎日拙い言葉でお祈りをしています。彼は救われないのでしょうか。私たちはパウロが命を賭けて語った、「行いによらない救い」を正しく理解して、正しく伝えているでしょうか。

「イエス・キリストが、あなたの罪のために死んでくださったと信じるならば、あなたは救われます」というのは、福音派プロテスタント教会の金科玉条です。でもこれは正しい聖書の教えでしょうか。聖書が本当に言おうとしていることが、正しく理解され、正しく表現されているでしょうか。

私たちが教えられ、受け入れ、語り伝えてきたことは、聖書の教えなのでしょうか。それとも、西欧のキリス

ト教という、一つの宗教の教えなのでしょうか。

個人的なことですが、私は自分たちの教会では、ここ 5 年ほどは、脱キリスト教宣言をしています。「もう私はキリスト教をやめました。私が信じているのは、キリスト教という西洋から渡ってきた宗教ではありません。私が信じ、受け入れ、頼り、語って行こうとしているのは、聖書が教えていることであって、西欧から伝えられたキリスト教の教えではありません」と、言い続けています。

少なくても、わたしが理解する聖書の教えと、西欧キリスト教の教えには、大きな隔たりがいくつもあるのです。今取り上げた信仰告白の問題は、その中の一つにすぎません。もちろん、西欧キリスト教の教えの何から何まで間違っている、聖書の教えとは異なっていると、言おうとしているのではありません。でも、多くの点で、しかもきわめて重要な点で、異なっているのです。そしてこの異なり様は、日本人に語るべき福音としては、決定的な問題となるのです。

西欧キリスト教の教えは、西欧人たちが自分たちの考え方、自分たちの感覚、自分たちの理解度から知ることができた聖書の記述を、自分たちの生活様式、自分たちの社会事情、自分たちの必要性に合わせて組み立て、構築し続けてきたものです。そこには正しいものも間違ったものもあります。ただ、正しいものでさえ、プロテスタントの正統信仰が確立されて、すでに 500 年近い年月が流れています。皮袋は 500 年も前の外国製なのです。今生きている日本人のことは、まったく考慮されていません。

私たちのプロテスタント教会は、カトリック教会の多くの間違いを、ただす形で誕生しました。間違いをただすために、私たちの先輩たちは勇敢に、命を賭けて戦いました。それは尊敬すべきです。でも、当時のまじめなクリスチャンたちが、まったく気づかなかった問題も、カトリック教会の教えにはたくさんありました。まったく気づかなかったのですから、そのような問題は、そのままプロテスタント教会の中にも流れ込み、きわめて基本的な、中心的な教理として受け継がれてきました。

例えば、幼児洗礼です。アナバプテスト派というグループが興り、活発に活動し始めたとき、プロテスタント神学の雄、正統信仰の象徴的存在であったジョン・カルビンは、彼らを迫害して、そんなに再洗礼を望むならば、おれが授けて進ぜようと、凍てつく川にかかる橋から、アナバプテストの信徒らを逆さ吊りにして溺死させました。私が今問題としてとしているのは、逆さ吊りにして溺死させたことではなく、プロテスタント神学の巨人、改革派神学の父と目されるジョン・カルビンが、カトリックの幼児洗礼を、疑いもなく引き継いでいることです。多くのプロテスタントの指導者たちは、キリストの代理としての教皇権や、マリヤ信仰には抵抗しましたが、一般信徒と聖職者を分ける、教職制度には反対しませんでした。他宗教の人たちの人権を無視したこと、奴隷売買も正当化したこと、植民地政策も祝福し、侵略戦争、覇権主義も当然とすることなども、カトリック信仰からしっかりと継承しています。その結果、世西欧キリスト教諸国の植民地にならなかった国は、全世界で、日本とタイという、たった二つの国しかなくなったのです。

日本のキリスト教宣教が停滞している大きな理由ひとつは、この植民地政策にあります。日本に入ってきたキリスト教は、ザビエルに始まるカトリックの宣教にしても、明治維新の頃に始まったプロテスタント宣教にしても、この西欧植民地主義の侵略の手先だと、理解されても仕方のない形で行われたからです。日本の為政者たちは、キリスト教宣教の背後にある、植民地主義の魔手を喝破し、何としてもこの侵略者たちを防ぎたかったため

に、キリスト教を迫害し、侵入をとどめようとしたのです。その影響が今も強く、日本人の文化と精神の中に残っているのです。

植民地政策などの非人道的行いは、西欧キリスト教の汚点です。私たちクリスチャンが、西欧キリスト教を受け入れるならば、これらの蛮行を、自分たちの宗教が犯した重大な犯罪として、お詫びしなければなりません。私はお詫びするのが悔しいという、かたくなな人間ですから、脱キリスト教宣言をしているのです。私は一所懸命に、聖書の教えを学び、聖書を語ろうと思っているのです。それが日本人への宣教では絶対に必要だと、確信しているからです。

この非人道的侵略主義、覇権主義、奴隷経済、植民地主義が、日本の宣教の非常に大きな妨げになってきたことについては、いつか、別の機会にお話しできればと願っています。

Ⅱ．　私たちは現代に生きる日本人へ語っているか

私たちのほとんどが日本人で、日本に住み、日本語を話し、日本人の感覚を持って、日本の歴史、文化や習慣を理解して生きています。だから、自分たちは日本人に福音を語ることができていると考えると、とんでもない間違いに陥ります。

私たちは、意外に日本人のことを知らないのです。特に、日本人の社会生活、文化、宗教、宗教観などの分野になると、非常に理解が難しくなります。その一つは、「森の中にいては森を見ることはできない」という言い方で、わかると思います。私たちは主観的に、自分の体験、自分の見たことで判断しがちです。

また、客観的に見ようとすると、多くはその分野の文献をあさることになります。ところが、日本にあるそれらの文献の多くは、日本人のものも含めて、西欧の社会学や民俗学、あるいは宗教学や心理学によって分析され、把握されたものであって、どこかがおかしいのです。それは日本の尺貫法で測って建てられている日本の建物を、メートル法やフィートで測量しようとするようなものです。測られるものではなく、測る計測器がおかしいのです。ましてや本間があり京間があり、江戸間があるなど、理解ができないことでしょう。

日本の文化や習慣、感覚や宗教意識や神意識を、西欧の学問の測りで測ろうとしているのです。有名な菊と刀などを読んでも、その感を強くするものです。日本には罪の意識がない。あるのは恥だとは、よく言ったものですが、日本人の罪意識が理解されていません。それは西欧人の罪意識の尺度を、日本人に適用しようとしているからです。

同じように、日本人の宗教感覚、神意識なども、西欧キリスト教感覚で分析し、理解しようとするとうまくいかないのです。あくまでも、純粋に日本人的な感覚で、理解しようと心がけるべきだと思います。

西欧キリスト教感覚で日本人を見ると、偶像崇拝者たちで、罪人です。何としてもそのような野蛮な宗教はやめさせ、日本人の多神教文化を破壊しなければならないということになります。でもこれは、18 世紀のイギリスとアメリカで同時に興った自分たちの文化の優秀さを誇り、それを他宗教他文化の人々に押し付ける、善意の上から目線の考え方にすぎず、本来の聖書の教えではありません。

聖書の教えには、優良な文化、劣悪な文化の差はありません。優秀な民族も劣等な民族もありません。皆同じで、平等です。すべて神によって神に似せて造られた人間です。その人間が神の愛の対象として造られ、生かさ

れています。そして神との交わりの中に人間としての最高の満足を得られるように、造られています。それが神に似せて造られているという意味です。

ですから、宗教意識があり、礼拝本能があり、神を本能的に意識し感じ礼拝しようとするのは、まさに、人間が人間であることの証拠、証なのです。西欧のキリスト教は、すべての異教徒を偶像礼拝者として糾弾しますが、宗教を持つこと自体は人間の本能であり、罪でも間違いでもないのです。ところが、西欧キリスト教は、日本人の宗教心自体をあしざまに言うのです。日本人の間違いは、真実の神を礼拝していないことであって、礼拝心、神意識を持っていることではないのです。

さらに西欧のキリスト教では、すべての人間はアダムとエバの罪のために、原罪を持つようになった罪人にすぎません。これも聖書の教えではありません。原罪などという教えは、聖書のどこにも見当たりません。罪の理解が間違っているのです。したがって悔い改めも間違っている可能性が高いのです。

人間は、神の直接の介入がなければ、神を信じることも悔い改めることもできないというのも、福音派の理解です。それで、先行恩寵などという教理も出てきます。それが完全に間違いなのではないとしても、基本的な間違いがあります。聖書によると、人間は罪のために人間性が破壊され、その破壊の影響はあらゆる分野に及んでいますが、神様に似せて造られた人間性が、ことごとく破壊しつくされ、消滅してしまったのではありません。かえって、神に創造されたん人間本来の姿は、しっかりと残り続けているのです。そして今も、不完全ではあっても、機能し続けているのです。

その人間性こそ、ローマ人への手紙２章でパウロが言う、異邦人も生まれながらに持つ心の律法です。異邦人が裁かれるのはこの心の律法、あるいは自分自身と呼ばれるこの律法によるのであり、旧約聖書、文字で書かれた律法によるのではないことが、明白に語られているのです。しかし、西欧のキリスト教は、旧約聖書の律法、ユダヤ人に与えられた律法で、日本人を裁き、その宗教意識、その宗教行事、その宗教に影響を受けた文化を裁き続け、糾弾し続けてきたのです。
いわば、右側を運転するアメリカの道路交通法を日本に持ち込み、何の配慮もなしに、左側を運転する日本の運転手を裁くようなものです。

旧約聖書の律法によって裁かれるのは、その律法が与えられたイスラエル民族です。日本人ではありません。っローマ人の手紙第２章に、はっきり述べられているとおりです。ただし、偶像礼拝の罪には基本的に二種類の偶像礼拝があることも理解しなければなりません。出エジプト記の十戒に記された、イスラエル民族に対するものと、ローマ書の１章に記された、全人類に対するものの２種類です。この二つの種類の峻別ができていない西欧キリスト教は、異邦人、異教徒に対する対応、アプローチの仕方、お付き合いの仕方、伝道の仕方に重大な間違いを犯しているのです。

日本人は日本人独特の宗教観、神意識を持っています。それは神に似せて造られた人間本来の姿、本性を非常によく保持した感覚です。ところが、原罪の教理に支配された西欧キリスト教は、この日本人の神意識、宗教意識の素晴らしさを理解できないのです。理解できないために、宣教によっても、糾弾ばかりする誤った宣教方策を採るのです。

私たちは、日本人の神感覚、宗教意識がいかに素晴らしいものであるか、聖書の教えから理解しなければなりません。もっともっとしっかりと、福音を語る対象である日本人を理解しなければ、福音を正しく有意義に語ることはできないのです。西欧諸国で形成され、構築されたキリスト教による、異邦人、異教徒、その宗教、その宗教意識の理解では、日本人への福音宣教は不可能です。もっと聖書の教えをしっかりと理解した上での、日本人理解、日本の宗教の理解、日本人の宗教意識・神観の理解が必要であり、その理解に立った宣教へのアプローチが不可欠なのです。

例えば、神はいないと平気で言う日本人が同時に非常に宗教的であること、神道と仏教が日本の宗教だと言われていながら、日本人の多くが自分は仏教徒だというのはなぜか。なぜ神道は宗教ではなく、文化だと言われたり、日本の精神だと言われたりするのか。神道と仏教の明白な違いはどこにあるのか、それがどうして習合、つまり混合しているのか。神道という宗教には、どうして教義や教理と言うものがないのか。八百万の神々と呼ばれる多神教的神道と、偶像を持たない汎神論的神道の違いは何か。神はいないと言ってはばからない日本人が神社に詣でるとき、彼らは何を礼拝しているのか。神社にはどうして神の御本体が存在しないのか。

日本人に伝道しようとしている私たちは、これらの事を理解しているでしょうか。理解すべきだと考えているでしょうか。これらの学びをしても、本当のところ、理解できないことが多く、人それぞれ理解も異なることでしょう。それでいいのです、様々な理解が出てきて当然です。理解しようといろいろと考えることによって、多くのことが分かってくるからです。

パウロはアテネのアレオパゴスでの説教で、少なくてもギリシャ人の宗教意識、神観神意識を理解し、その上に立った宣教をしています。私の見るところパウロのアプローチには弱点もあります。しかし、西欧キリスト教の日本人へのアプローチよりは、よほど優れていると判断するものです。

現代日本人に聖書の福音を語ることができるように、日本人伝道者として、もう一度、福音の理解をし直し、日本人の理解を深めていきたいものだと思います。